

Title	文化・科学 真実という選択：周作人の文学革命初期の文学主張から見る沈從文の文学観
Author(s)	楊, 靈琳
Citation	OUFCブックレット. 2014, 3, p. 191-213
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27086
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

真実という選択

——周作人の文学革命初期の文学主張から見る沈從文の文学観

楊 靈 琳

沈从文（1902-1988），原名沈岳煥，中国現代作家。出生于现在湖南省西部的湘西，具有土家族、苗族、汉族血统。沈从文在1924年进入文坛以后，文坛里充斥着各种各样的流派。但是被称为自由主义作家的沈从文，虽然从未选择加入任一流派，（虽然他常常被认为是“京派”文人，但其自身是否定这一定位的。）但是在创作后期自称是“五四后期作家”。沈从文为什么会对自己做出这样的定位？他在文学创作的道路上难道真的选择并继承了五四精神吗？如果是这样，那么他是否受到了其他五四前期作家们的影响？围绕这些问题，本人考察了沈从文与五四文坛核心人物之一周作人两者的文学主张的关联性。本次论文，将围绕这些关联性进行论述。

1. はじめに

沈從文（1902 - 1988），本名は沈岳煥。苗族，土家族，漢民族の混血という中国近現代文学作家である。彼は現在の湖南省湘西土家族苗族自治州鳳凰県に生まれた。ここは昔苗族鎮圧のために築かれた小さな田舎の軍人の町である。沈從文の家族には軍人が数人いる。彼も少年時代に従軍歴があった。

1916年，沈從文は14歳足らずで鳳凰県の軍事学校に入り，1917年には軍人の家系で地元の軍隊に入った。学校の代わりに軍隊でほぼ8年間を過ごし，22歳で上京するまで，軍隊に従い湖南省の辰州，懷化，常德などを転々とした。少数民族の血を引く彼は1924年の文壇登場以来，出身地である湖

南省の西北地域・湘西を舞台に、軍人、苗族、売春婦などのこの地の住民をモデルとした作品を数多く創作した。湘西の風景や人情を反映した作品は、彼の特徴を最もよく表していると認められている。

沈從文の創作活動の開始から成熟期に入るまでの期間は、ちょうど20年代—30年代の中国の新文学誕生、発展の時期であった。この時期の文学創作の思潮は多様で、20年代と30年代で文学創作の主流も異なっていた。

20年代は文学革命の時期であり、新文学の誕生の時期である。文学革命は1917年1月から始まった、文言文の旧文学に反対し、白話文の新文学を提唱する文学革命運動である。文学革命の初期に提唱された新文学は、白話で文章を書くことを強調する一方で、個人や個性解放を提唱するという特徴もあった。1928年、創造社は「プロレタリア文学」を紹介し、「革命文学」という文学創作の思潮を提唱した。そのメンバーである郭沫若は、『創造月刊』⁽¹⁾で「個人主義文芸の時代は既に去ってしまい」、「その代わりに立ち上がるのは」きっと「プロレタリア階級の文芸である」⁽²⁾と宣言した。成仿吾はそれに続き、『從文学革命到革命文学』(1928)で農工大衆に向けた創作をすべきであると提唱した。

創造社の主張は一部の文人に反対されはしたが、後の中国文壇における新文学の創作に与えた影響は無視できるものではない。1930年代になると、「革命文学」に影響を受け左翼作家連盟（略称「左連」 筆者注）という組織が成立した。この組織の成立は、「プロレタリア文学」の輸入や「革命文学」の出現と緊密に繋がっている。「左連」を中心とするプロレタリア文学思潮は、革命を追求する多数の文人に大きな影響を与え、30年代の中国文学の主流になった。

ここで注意したいのは、創造社が革命文学を提出する際、魯迅がその欠陥を明確に指摘したということである。魯迅は、創造社は革命経験もなく、いかに残酷かなど知らずに「紙面上でやたらと「やれ」、「殺せ」、「血だ」⁽³⁾と言うだけであると述べ、後に左連の成立大会ではこれを「對於左翼作家連盟的意見」(1930)と題して講演した。この講演で魯迅は左翼作家に対し、現実と革命をはっきり理解してから文学作品を創作すべきと強調している。

「革命の実際の状況が分からなければ、非常に「右翼」になりやすい。革命は苦痛であり、その中には必ず汚れと血がある。決して詩人が想像するような面白く完璧なものではない。革命はしごく現実的なことであり、…(筆者中略)…決して詩人の想像するロマンティックものではない」⁽⁴⁾。つまり魯迅は、革命の本質をよく知らないごく一部の左翼文人が、ただスローガンを無駄に叫ぶだけという欠点を明確に知っており、それに対する作品の真実性、つまり作家の経験の重要性を強調しているといえる。しかし1933年、左翼文学運動のリーダーである周揚(1908—1989)は、「關於「社会主義現實主義与革命浪漫主義」」(1933)という論文でソ連の社会主義現實主義という創作方法を輸入し、文学の政治性や教育性ばかりを強調して、文学の現実性をなおざりにした。この文章は、後の左翼文壇の創作の基調となり、30年代の主流であった左翼文学は、知識人である作者のプロレタリア階級世界における体験を重視せず、一方的に作品と政治の結びつきを強調するという大きな特徴を持つようになった。

沈從文は、ちょうどこのように文学思潮の乱れた20年代—30年代に文学創作の世界に入り、その後の作家人生は一貫して自分の人生経験に基づき、軍人、苗族、売春婦という三集団について創作した。

この三集団はどれも民国時期に大変差別されていたということに注意されたい。現在の中華人民共和国において、軍人は差別どころか尊敬の対象ですらあるが、民国時期にはそうではなかった。当時は「兵士の中に良い男はいない、良い男なら兵士にはならない」という俗語が流行したほどで、兵士に「丘八」という蔑称があった⁽⁵⁾。沈從文の作品には、当時の民衆は軍人に対して「奸淫擄掠」、「殺人」、「放火」といった悪い印象しかないという記述もある⁽⁶⁾。

また苗族に対する差別について、『湘西苗族実施調査報告』に記録がある。「兩晋、南北朝及び唐、五代、宋、元、明、清は時に苗族を征服する」⁽⁷⁾、さらに民国になってからも、専制政府に対し湘西の苗族が数回蜂起をしたが、大量殺戮を以て全て鎮圧されたという⁽⁸⁾。つまり苗族の人々も、当時の差別・排除の対象であったといえる。

本論文では、沈從文がなぜこの三集団を創作対象に選択し、文学思潮の乱れた 20 年代—30 年代において、どのような文学創作の道を選択したのかについて論じてみる。

まず、沈從文自身が如何なる文学観を持っているのかについて探求したい。

2 . 沈從文の文学観

1) 「別の階級」

「別の階級」という言葉は、沈從文が文壇に登場した翌年に書いた評論文「北京之文芸刊物及作者」(1926)に登場する。これは長編評論文としては初となる作品で、新文学のこれからの発展方向について論じており、「別の階級」という言葉を用いて文芸の「大きな源泉を真に掘り出せるのは、やはり別の階級の人々」⁽⁹⁾であると述べられている。彼はこの言葉の指す人々について、床屋職人や縫製職人、人力車夫、兵士などの例を挙げたが、具体的にどのような集団を指すのかについては説明しなかった。

この文章に対する先行研究は極めて少なく、唯一の専論ともいべき斉藤大紀の論文「一九二五年、北京、文芸の畑——沈從文「北京之文芸刊物及作者」をめぐる一」(2006)にも、「別の階級」については「いわば左翼的な文脈から生まれてきた言葉ではない」⁽¹⁰⁾という指摘にとどまった。また斉藤は、「北京之文芸刊物及作者」という評論には「職業作家—むしろ投稿作家というべきかもしれない沈從文の文学観が現れ」、「沈從文という作家の歴史において重要なものであるばかりでなく、中国現代文学史においても、あるいは貴重な証言たりえているのかもしれない」⁽¹¹⁾と述べ、彼の文学観を理解する上での重要性を示した。

この「北京之文芸刊物及作者」は、新文学を掲載する北京発行の 22 種の刊行物を列挙し、各々に解説と評価が加えられた。その具体的な書き方を見ると、文芸刊行物や作者を単に羅列して紹介しているだけで、彼の文学観が系統的に示されているわけではないように思われる。しかし北京の新

文学の具体的な刊行物に対する批判は、実際に当時の北京における新文学生産システムの根幹の部分で批判していると考えられる。

沈從文はたとえば『京報副刊』について、その編集者である孫伏園の原稿の採用方法を批判している。

それ（副刊）から、我々は大差なしという感覚を抱く。つまり、毎号の『小説月報』にある幾つかのなじみの名前が全てここにある。もちろん外からやってきた客員の編集子先生なら拒絶するとは言えないが、知り合いであれば、その原稿は副刊に載りやすい。（これはどの刊行物でも同じである、結局編集者に多くの困難を与えた。）⁽¹²⁾

沈從文は孫伏園の編集する『京報副刊』だけでなく、北京の大部分の副刊がコネによって編集されることを批判し、ひいては新文学の未来を憂えているものと考えられる。どの刊行物にも同じ作者しか出てこなければ、原稿の採用方法がコネだという裏事情が分かり、読者の新文学に対する興味や創作意欲はなくなってしまおう。そうなれば読者、作者群は共に縮小していき、新文学も滅んでしまおうだろう。さらに沈從文は、このような採用方法をとった雑誌『沉鐘』⁽¹³⁾の寿命は10期にすぎなかったという実例も挙げた。

刊行物の読者は「片方の目で文章を読み、もう片方の目は文章の題名の下にある人名に向ける」。このような賢い人は、さすがに「両目でただ文章を読むだけで人の名前を見ない」愚かな人よりは多い。だから近年の毎期の発行部数はたったの1000部、しかも10期以上続けられないのだ。⁽¹⁴⁾

これらから、沈從文が最も関心を寄せたのは新文学の運命であり、彼は新文学発展における、読者群の拡大と彼らの創作意欲向上による作者への転向という二点の重要性を認識していたのであろう。

『京報副刊』はコネによる原稿採用を続けたため、質はなかなか向上しなかった。沈從文は、『沉鐘』と同様の結果にならないよう、また新文学の読者群を広めるためにも、読者に積極的に創作してもらうことから始めるべきであると主張した。読者の新文学に対する興味や創作意欲を増進し、読者群、作者群の両方を拡大すれば、新文学を拡大・再生産できると

述べたのである。

さらに彼は、どのような読者が作者になれば新文学発展を推進できるかについてこう述べている。

これは私の一種の偏見かもしれない。未来の文芸の花の希望を、彼らのように人為的に育てて茂らせようとするなら、結局我々を失望させるであろう、と私は思う。私が言いたいのは、およそ現在、文芸を掘り出す鍬を自分の肩にかつぎ、前に向かって歩む学生が、なにかしら掘り出せるとしても、大きな源泉を掘り出すには、やはり別の階級の人たちに取りかかってもらわなければならないということである。この別の階級の人とは、学生や教授ではなく、官僚や政客でもない。ただあの床屋職人、縫製職人、人力車夫、兵士などだけである。⁽¹⁵⁾

これに対して斉藤は、「これらの人びと(「床屋職人、縫製職人、人力車夫、兵士など」を指す 筆者注)が作家として文学生産システムに組み入れられることも容易ではないと思われるので、現実的には「別の階級の人たち」の世界を知る既成の作家が彼らの使用する言語表現を積極的に作品に取り入れるべきであるということを行っているのであろう」⁽¹⁶⁾と述べ、床屋職人、縫製職人、人力車夫、兵士といった「別の階級」の人々が作者になるのは不可能であるとした。

しかし沈従文は、40年代前半に書いた文章「明日的文学作家」⁽¹⁷⁾で「床屋職人、縫製職人、人力車夫、兵士など」の人々が作者になることを期待している。彼はこの中で日中戦争を題材に創作する当時の作家について論じ、一部の作家が「英雄は生き生きと描くが、平凡を描くには手を焼くようだ」⁽¹⁸⁾としながら、忠実かつ適切に「ある歴史の場面や人々の生命の発展、人生の浮き沈みといった大著を書くなら、別種の作家の努力を待たなければならない」⁽¹⁹⁾と指摘した。この「別種の作家」について、沈従文はこう述べている。

このような若い朋友たちはどの部隊にも存在するが、勉強や他の仕事が忙しく目下文章を書くことに興味が無い。しかし彼らは将来きっと筆をとり、民族新生のため奮闘の過程を記述するであろう。これは疑うべくもない。

⁽²⁰⁾

戦争を経験したことのない作家に日中戦争の真実を記録することはできない。沈従文は作家の経歴を重視し、戦争を知らない作家よりも現在の従軍兵の方がより良い文章を書けると考えたのである。

つまり新文学を発展させるためには、文人や学生などの知識人ではなく、非知識人である「別の階級」の人々による新文学の創作が重要とされたのである。「別の階級」が書いた文章こそが、無体験の知識人の作品よりも彼らの世界を忠実に反映でき、より広い範囲の読者と読者の共鳴が得られるのである。

もちろん齊藤が述べたように、「別の階級」が「作家として文学生産システムに組み入れられることも容易ではな」く、これまでのような狭い人脈の中での採用では、彼らによる創作は望めなかった。沈従文は、副刊編集者の孫伏園を批判することによって、彼ら編集者がまず「別の階級」のために文学創作の道を積極的に切り開き、新文学が悪循環に陥って下火になるのを防ぐべきだと主張したのではないだろうか。

つまり「北京之文芸刊物及作者」における沈従文の主張は、

- 1、「床屋職人、縫製職人、人力車夫、兵士など」の「別の階級」の人々は、自ら筆を握り自分の経験を書くべきである。
- 2、編集者は、「床屋職人、縫製職人、人力車夫、兵士など」の文章を積極的に採用すべきである。

の2点に集約されるが、それはあくまで、新文学発展を意図する問題提起だったのである。

これら新文学に対する主張は、彼の経歴と深く関わっている。

沈従文は小学校教育しか受けていない、湘西という田舎の兵士、つまり「別の階級」であった。1924年に「北京に着いた時には句読点すら知らなかった」⁽²¹⁾ほどで、文学創作の道を選んでから文壇に登場するまでに、多くの壁にぶつかったのである。

彼はデビュー前にも数々の作品を『晨报副刊』に投稿したが、当時の編集者・孫伏園はこれを全て採用しなかった。晩年の沈従文は当時を振り返り、「数十篇の投稿を貼りつけて一冊にし、林語堂、銭玄同、周作人らの目の前

で笑い話にされた。『これは大作家の沈誰々が書いたものだ』と言い、びりびりに破いてゴミ箱に捨てたのだ』⁽²²⁾と述べている。

一人上京し、文学創作を選んだ無職の沈従文にとって、原稿料は唯一の希望であった。しかしなかなか採用に至らず、食うに困るほど困窮してしまったため、彼はやむを得ず当時文壇で名の売れた郁達夫に自分の悲惨な境遇を訴える手紙を出した⁽²³⁾。郁達夫は家にまで訪れ、更に「給一個文学青年的公開状」(1924)という文章で沈従文の境遇の不公平さを訴えた。孫伏園が『晨报副刊』から『京報副刊』へとかわると、郁達夫は沈従文を『晨报副刊』の新しい編集者に紹介し、沈従文の文章は『晨报副刊』にしばしば採用されるようになった。

このような体験から、沈従文は「別の階級」が作家として文学生産システムに組み入れられるのは大変難かしいことを悟り、個人や新文学の将来を考慮し、孫伏園のような編集者のやり方への批判、「別の階級」の文章の積極的採用を主張したのであろう。

沈従文が田舎の一兵士として筆を握り、よく知る湘西の風景とその地の軍人、売春婦、苗族などの作品を一貫して描くことによって、「北京之文芸刊物及作者」における主張を自ら実行したわけである。

2)「田舎者」

湘西出身の沈従文は、『阿黒小史』序」(1928)で初めて「田舎者」と自称してから、作品中でしばしば「田舎者」と自称するようになった。

この小さな本は... (筆者中略) ...文字は下手で可笑しいが、私はちょうどこのように単純な中で自分の雰囲気を変えて、自分なりの道へと転換したい。名作家に比べると美しい言葉や長い文を書くのが上手ではないから、これで私が田舎者であるとわかってしまうだろう。私はそもそも田舎者という名称の下にいることを否定できないのである。思想も行為も服も、どうしても全て流行から外れてしまう。この欠点ははっきりわかっているが、このまま続けるしかないし、挽回する気もない。今では敢えて田舎者らしくするまでになってしまった。⁽²⁴⁾

沈従文は1928年に自分が「田舎者」とであると認め、自分なりの「田舎者」

の文学創作道を始めようとした。そして「習作選集代序」(1936)で再び「田舎者」と自称し、当時の文壇には田舎者が非常に少ないと指摘したのである⁽²⁵⁾。沈從文はかなり自分が田舎者であるという意識を踏まえて作品を創作していると考えられる。そして、彼の文学観を窺おうとすれば田舎者という意識を扱わなければならないだろう。

先行研究では、彼の田舎者という意識には少数民族の意味も含むと論じられている。凌宇は沈從文の田舎者意識を取り上げ、その中に苗族という含みを持つと指摘した。「彼が自分が「田舎者」であると繰り返すのは、苗族文化という伝統を持つことを認めた、その表明である」⁽²⁶⁾。また今泉秀人は、作中の「田舎者」という表現を扱い、「田舎者」は沈從文にとって都市、知識人、漢民族と対立し、かつ苗族を代表する「湘西地方の非漢民族」であり、彼自身の「中国社会の抑圧・蔑視の中で形成された非漢民族出身者の寓意的な存在表白」⁽²⁷⁾であると指摘した。

沈從文の苗族関連の作品は確かに先行研究の通り、「田舎者」の意識に蔑視される非漢民族という側面が含まれている。しかし、「田舎者」という言葉が地域性を持つことも決して無視してはいけない。『從文自伝』(1934)から判断すると、沈從文は湘西を出る前にはまだ自分が「田舎者」だと思っていなかった。

学校には何人が田舎者の同級生がいた。皆体が異様に大きいから、一人がこいつら田舎者を馬にして、小柄なやつを背中に乗せて別の馬のやつと戦わせようと言い出した⁽²⁸⁾。

一部の兵士は自由に外出できないが、自由にできる兵士もいる。たぶん町の人々は外出でき、田舎者は外出できるがその勇気がないのだろうと思うのだ。

私の記憶では、自分は何の制限もなく自由に出かけられた。⁽²⁹⁾

これは沈從文の、湘西での従軍生活の思い出である。ここからは、湘西からまだ出ていなかった頃は自分が田舎者だという意識がなかったように感じられる。

また「落伍」(1929)には、ある同郷の副官がわざわざ上海まで「私」に会

いに来て、「軍需大人」という軍隊の偉い人を紹介しようとした際に、「私」は自分が田舎者なので恥ずかしくて会いたくないという場面があった。「落伍」は沈従文自身の体験に基づいて書かれたものなので、作中の「私」の田舎者意識は、沈従文自身のものと理解しても良いだろう。

彼は湘西から出るまで自分が田舎者であるという意識がなかったが、北京、上海に行って田舎者の意識が生じたと推測できる。つまり沈従文の田舎者の意識には地域性があり、湘西人という側面を含んでいると理解できるだろう。

また『湖南的西北角』（1947）によると民国時期、湘西人は外部の人々に野蛮人であると差別されていたという。

交通が不便なので雰囲気は閉鎖的である。外部の知識は入りにくいし、現地の人々もあまり外へ出ない。…（筆者中略）…匪賊になることやアヘンを栽培することが法律違反かどうかすら分からない⁽³⁰⁾。

湘西の民族性を誤解する人がいるのも不思議ではない。私（李震一 筆者注）も何人かの友達とこの話をしたことがある。彼らはよくふと「匪賊のやり方、アヘンの毒質」と言ってしまう。これは失礼な嘲笑と言うよりむしろ悪意に満ちた辱めである。⁽³¹⁾

当時の人々は湘西に対し、野蛮で未開であるなどマイナスイメージしかなかったことが分かる。沈従文は湘西訛りがとても強く、湘西から北京に移った際、湘西人に対する田舎者という差別を体験したに違いない。「用A字記録下来的事」（1925）で、有名人の誕生会に参加した時の心の動きについて、上流社会の宴会では自分はまるで排除される異物のようで、宴会の酒や料理は全て自分の尊厳と交換してきたようだと言った。「綿靴」（1925）では、貧乏な「私」は綿靴が破れても履き続けるしかなく、北京の教育局の局長である上司に嘲笑されたことが描かれている。

沈従文の田舎者認識が、湘西人の排除・差別という背景から生じた自己再認識であったことは明らかである。しかし彼は一方的に卑下してしまうわけではなかった。その後、1928年の文章で勇敢にも田舎者だと自称し、1930年に書いた「略伝——従文自序」の中で、自分が湖南省西部の鳳凰県の出身であることをはっきりと表明し⁽³²⁾、さらに後には同様に排除される苗族や軍

人という身分を次々と認めている⁽³³⁾。

沈從文の「田舎者」という言葉は湘西人を背景とし、排除されるという特徴を持つ。そして湘西人など排除される者という要素と、自分の経歴、湘西地方の特徴、及び全国の普遍性を結び付け、湘西人の中から、全国でも同じように排除される軍人、売春婦、苗族という排除される三集団を創作対象として選択した。その理由は、排除される痛みを体験した沈從文が、苦痛と不公平な運命を改善しようとしたためであろうと思われる。この三集団は社会に発言権のない人々であり、排除される運命を訴え改善する機会すらない。沈從文は彼らの一員であり、かつ社会的に認められた作家の一人でもあるという二重の身分を活かし、彼らの世界を書くことで、今まで誤解や無知の対象であった彼らの真実を明らかにし、排除される運命から救うとしたのだろう。これら排除される者を創作対象にしたことから、沈從文が一人の作家として国家に対する責任を自覚し、自分の作品を通して差別や排除のない理想的な社会構造を提示したことが分かる。

これを、「北京的文艺刊物及作者」における「別の階級」は自ら自分の経歴を書くべきであるという真実性を強調する文学創作の主張に関連付けると、「別の階級」は彼の場合、「田舎者」、排除される者を指していると理解できるだろう。

以上が沈從文の文学観のまとめである。次に、彼のこの文学観は完全にオリジナルのものであるのか、それとも誰かから継承したのかについて論じたい。

3. 周作人の継承

1) なぜ周作人なのか

『従文自伝』(1934)において沈從文は、五四思潮の影響を受け、知識によって社会を改善しようという信念を持って1924年、五四の発祥地である北京へ行ったと述べている⁽³⁴⁾。また彼は晩年、「私が当時追求したのは、五四運動の提出した文学革命という理想であった」⁽³⁵⁾と振り返った。

文学革命初期、知識人は如何なる新文学を築き上げるかについて様々な言論を闘わせた。これらの言論は主に二つに分けられる。一つは言語面についてである。もう一つは思想面、つまり新文学は何について書くべきかということについてであり、最も重要な人物は周作人である。彼は五四時期非常に影響力のあった理論上の先駆者であったと思われる。

沈從文は文学革命という理想を追求する上で、創作において多少なりとも周作人の影響を受けていると考えられる。キンクレーのインタビューで彼はそれを認めている⁽³⁶⁾。沈從文と周作人が個人的に交流があったかの記載はほぼないが、彼の作品における細かい幾つかの点から周作人の影響が見出せる。

沈從文の『記胡也頻』(1931)で初めて雑誌『語絲』に載せた小説「福生」(1925)が、胡也頻の推薦と周作人の同意を得て発表したものである⁽³⁷⁾ことを明かした。周作人は1922年3月、『晨報副刊』で「『阿麗思漫遊奇境記』」という文章を発表し、その中でルイス・キャロル作『ふしぎの国のアリス』を紹介した。沈從文の「阿麗思中国遊記」(1928)が『ふしぎの国のアリス』から構想を得たものであることから、周作人のこの文章と関わりがあることが推測できるだろう。さらに沈從文は「從周作人魯迅作品學習抒情」(1940)という文章で、周作人の「自己的園地」(1922)を多く引用した。「自己的園地」は「五四」以来の自由主義者の「文学の自由」の一つの考えの代表であり、その中に「人間と芸術、作品と社会に対して、非常に貴重な見解がある」⁽³⁸⁾ことを示すと同時に、周作人の文章は「永遠に健康的で人間性に合う」⁽³⁹⁾ものだと賛美した。また周作人は「自己的園地」の中で、文芸作品の創作を花を植えることに例えている。沈從文は後に「北京之文芸刊物及作者」で同じように文芸作品を「花」と比喩した⁽⁴⁰⁾。

しかしそれについて細かく論じた先行研究はごく少ない。最も重要なのは、孫歌の「試論抽象—読沈從文四十年代論説文」(1995)と小島久代の「一九四〇年代における沈從文—四〇年代の評論を読む」(1999)という二篇の論文である。孫歌論文は、沈從文の40年代の評論文と周作人が文学革命初期に書いた「人的文学」(1918)及び「人的芸術派的文学」という観点を提出した文章「新文学的要求」(1920)を比較したものである。ここで孫歌は「沈

従文が後に提唱する抽象的な美学観と、周作人が1920年に提出したこの観点（「人的芸術派的文学」を指す 筆者注）は非常に一致している」と指摘しつつ、「沈従文は五四の「人的芸術派的文学」の伝達者という名に恥じない」⁽⁴¹⁾とした。また小島久代の論文は、沈従文の40年代の評論文が周作人の文学観を継承したという孫歌の指摘を認める一方で、沈従文が「普遍の人間性」に基づく文章を書くべきだという梁実秋の主張も継承していると指摘した。しかしこの二篇はまだ抽象的である。周作人と沈従文の主張を明確、系統的に解説していないし、いずれも沈従文の40年代の評論文に限って論じる。次では、周作人の文学革命初期の文学観を整理しながら、これまでにまとめてきた沈従文の創作の特徴、及び文学観と結びつけて論じていく。

2) 周作人の文学革命初期の文学観

周作人の文学革命における最も重要な貢献は、新文学構築に「人的文学」を提唱したことである。「人的文学」とは、新文学と旧文学を区別する本質的な特徴であり、五四時期の文学の中心概念である。五四思潮の影響で上京した沈従文はこの言葉を知り、「燭虚」(一)(1940)の中で、「人的文学」は「人の胸を打つ言葉である」⁽⁴²⁾と述べている。

「人的文学」という言葉は、周作人の文章「人的文学」(1918)の中で提出された。その意味について周作人は、「人道主義に基づき、人生の諸問題について記録し研究した文章が人的文学である」⁽⁴³⁾と説明している。また「人的文学」が、人間生活の改善を創作の目的にするものであると示している⁽⁴⁴⁾。さらに周作人は、理想的な生活とは何かについて、まず個人同士の関係が平等になるよう改善すべきだと指摘している⁽⁴⁵⁾。

また、「人道主義」について周作人はこう述べている。

私の言う人道主義は、…（筆者中略）…一種の個人主義、人間本位主義である。なぜなら第一に、個人は人類の中にいるからである。まるで森林の中の一本の木のように。森林が茂っているなら、それぞれの木も茂っているはずである。…（筆者中略）…第二に、個人は人類を愛すべきだからである。自分は人類の中において、人類と自分は関係があるのだ。…（筆者中略）…所謂

利己であり、同時に利他でもある、利他は利己でもあるというのは、このような意味である。だから、私の言う人道主義は個人から始めるのである。…（筆者中略）…人類を愛し、まず自分が一人の人間として、その地位を得ることから始めなければならぬ。⁽⁴⁶⁾

この人道主義に対する説明は非常に抽象的ではあるが、人類の平等を間違いなく強調している。各々個人は全て同じ人間であるので、自分を軽視せず、また他人も軽視してはならないと示しているのである。

周作人は「人的文学」で、新文学の社会における効用性について論じている。それは、文章を書くことによって人間の生活を改善することであり、その中で最も重要なのは、人と人の関係を不平等から平等へ改善することだと主張しているのである。後に「平民的文学」(1919)の中で、新文学に対して「普遍」と「真摯」という二つの要素を提出し、“人的文学”の概念をさらに具体化した。

平民文学は…（筆者中略）…普遍と真摯、この二点である。第一に、平民文学は普通の文体で普遍的な思想や事実を書くべきである。我々は英雄や豪傑の仕事や、才子佳人の幸福を書く必要はない。その代わりに、世間の普通の男女の様々について書けばよい。…（筆者中略）…第二に、平民文学は真摯な文体で、真摯な思想や事実を書くべきである。…（筆者中略）…自分の真の考えや感情を表現しなければならない。⁽⁴⁷⁾

ここから、新文学の普遍性つまり人間の共通性について、そして新文学の真实性について書くことを強調しているとわかる。「自分の真の考えや感情を表現」という言葉には、自分の経験に基づいて書くことが示唆されており、「普遍」と「真摯」という二つの言葉は、新文学における普遍性と真实性を訴えているのである。また周作人は、「新文学的要求」(1920)、「自己的園地」(1922)で、新文学は「人的芸術派的文学」であり、「独立した人間性のあるものである」⁽⁴⁸⁾とも指摘している。ここで言う「人間性」とは、「平民的文学」において提起した人間の共通性のことであると考えられる。さらに「平民的文学」で言及した新文学の真实性について、「地方与文芸」(1923)の中で具体化している。

環境から受け継いだものを融合させ作った自分の真の心が…（筆者中略）…
このような作品は自然とあるべき特性、つまり国民性、地方性、個性を備える
のであり、これは生命であるともいえる。⁽⁴⁹⁾

つまり新文学の真実性は、作者の経験や熟知する地方の特徴が表れることを
指しているのである。これらに基づかなければ、作品は生命を持たないもの
になってしまう。

周作人が新文学に対して提出した、五四時期の中心概念である“人的文学”
という文学観は下記のようにまとめられる。

- (1) 人間関係や生活の改善を創作の目的にすること。
- (2) 人間の共通性、つまり人間性について書くこと。
- (3) 作者が自分の経験や熟知する地方の特徴に基づいて書くこと。

3) 沈從文の文学観との関連性

これらを沈從文の作品に反映される文学観と関連付けてみたい。

沈從文は、その作家人生において一貫して軍人、売春婦、苗族という排除
されがちな三集団を対象として、創作した。これは周作人の「作者が自分の
経歴や熟知する地方の特徴に基づいて書くこと」という主張に一致する。そ
して排除される者を題材にすることによって、人間の本性にある排他性を批
判し、ひいては人間関係や生活の改善を目指していると考えられる。これら
は全て、周作人の主張と完全に一致している。

沈從文は周作人の文学観を選択し、これを継承する一方で、周作人の主張
を具体化して、自分なりの主張を提出した。それは「別の階級」の人々が、
自ら筆を握り自分の経験を書くべきであるという主張である。これは周作人
の経験を重視し、真実性を強調する考えに類似し、沈從文自らの体験から得
たより具体的な主張であろう。つまり沈從文にとって、作者の経験を書き込
んだ作品のみが生命力を有するというに足る作品だったのである。

沈從文の作品の真実性に対する拘りは、「作者間需要一種新運動」(1936)
という文章の中にはっきりと現れる。

「時代」というものは一言では言い尽くせない。この言葉を追ったために、

中国ではここ十年で少なくとも 30 万人の 20 歳に満たない青年が泥の中で腐っていった。この言葉はそもそも無であるが、青年に「順うものは生き、逆らうものは滅びる」とでもいうような魔力を感じさせたのだ。…（筆者中略）…「大衆のため」という観念を鵜呑みにし、結果奇妙な不自然の中で山ほどの作品を書く。これらの作品が…（筆者中略）…出版産業に与えた刺激は少なくないが、読者の新文学に対する失望という反感を育ててしまっただけであろう。その原因は、「時代」ばかりで「芸術」を忘れてしまったことにある。⁽⁵⁰⁾

30 年代多くの文人が左翼文学思潮に従ったことと関連付けると、ここで言及する「時代」とは、当時主流であった「左連」を中心とするプロレタリア文学思潮を指していると考えられる。沈從文は 30 年代、ごく一部の文人たちが自分の真の感覚や経験を重視せず、物欲や名誉といった目的のため、左翼文学思潮を盲目的に追求することを批判した。独自の体験を書かず、馴染みのないプロレタリア階級の人々の生活を無理に書こうとすれば、無個性にスローガンを叫ぶのと大差のない、空虚な作品にしかならないだろう。その状況が長く続けば、新文学の命はきっと失われてしまうと沈從文は指摘した。彼は新文学の生命が永遠に続くよう、時代の大きな流れを恐れず、自分にとっての真実である周作人の文学革命初期の文学観を選択したのではないだろうか。

4. まとめ

本論文では、まず沈從文の「北京之文芸刊物及作者」とその後の作品を扱い、彼の新文学に対する文学観について論じた。そしてその結論として、編集者は「床屋職人、縫製職人、人力車夫、兵士など」の文章を積極的に採用すべきこと、彼ら「別の階級」の非知識人は、自ら筆を握り自分の経験を書くべきことの二点が得られた。これは沈從文が、作家の経験を非常に重視したことを表している。この二点は彼の初期の主張ではあるが、後の作品とも関連付けてみると、この主張は創作においても一貫していたことが分かった。

また「別の階級」は「田舎者」、排除される者を指すと結論付けた。沈従文が自分の経験や地方の個性、全国の普遍性を考慮し、軍人、売春婦、苗族という排除される者を創作対象に選択したのは、人間の排他的側面を排除するためである。このことから、彼が一作家として国家に対する責任を果たすべく、将来社会を再構築するため、作中に差別や排除のない社会構造を提示したことも分かった。この創作意図は、沈従文の民国時期における作品の特徴であり、真髄であるといえる。

五四時期の周作人の文学観から分かったのは、沈従文が主流であった左翼文学思潮を選択せず、周作人の真实性を強調する文学観を選択したこと、そして作者の経験のみが作品に生命を吹きこめるのだと信じ、そうしなければ新文学は減んでしまうと確信していたことである。

沈従文が追求した真实性という文学主張は、五四新文学の中心概念であり、後の70年代中期以来の中国文学の発展に対し重要な意味を持つ。70年代の中期に誕生した「傷痕文学」から、中国現代文学が五四時代の真实性を強調する主張へ回帰し始めたという。また、80年代の中期に誕生する「尋根文学」は、文壇に長期にわたり存在した単一の政治的視点をより徹底的に打破し、文化的視点から文学創作に対しての主張を出した。「尋根文学」の作家の「根」に対する解釈は様々であるが、作者には出身地や熟知した地方、現地住民の特徴について書くという共通点がある。そのため「尋根文学」には、濃厚な地域性や民族の特色が溢れている。例えば湖南省出身の韓少功(1953-)は沈従文と同様、自分の熟知する湖南の西北部・湘西を舞台に、土地の原始部落を描いた「尋根文学」の代表作、「爸爸爸」(1985)を創作した。王安憶(1954-)は「長恨歌」(1999)に、自分の育った上海の40年代—90年代の変遷を描いた。また、昨年ノーベル文学賞を受賞した山東省出身の莫言(1955-)は、山東省の雰囲気濃厚な「紅高粱」(1986)、「豊乳肥臀」(1995)などの作品を創作した。

80年代中期から出現した「尋根文学」からは、沈従文が選択した周作人の「作者が自分の経験や熟知する地方の特徴に基づいて書くべきである」という主張がいくらか見出せるだろう。また、「尋根文学」の提唱者である阿城

(1949 -)は「尋根文学」の意義について、「中国の小説が世界文化と会話するには、十分に中国文化を浸透させなければならない」⁽⁵¹⁾と述べている。つまり「尋根文学」の作者の考えは、中国の小説が世界文学の仲間入りを果たすには独自の個性を持たなければならない、この個性は中国の各地方や当地の人々の特性を描くことによってのみ現れると理解できる。

このような考えを最も早く出したのは周作人であった。周作人は「読『草堂』」(1923)の中で、「理想的な中国文学は、人類共通の情を持つと同時に民族性と地方性も完備する」⁽⁵²⁾のものであると指摘し、後の「『旧夢』序」(1923)では「強烈な地方趣味は、まさに世界文学の中の重要な成分である」⁽⁵³⁾と述べた。つまり地方の特性や民族性を現す文学こそ、理想的な中国文学といえるということである。周作人は、このような中国文学にのみ個性があり世界文学に入り得ると指摘し、沈從文は最初にこの周作人の主張を作家生涯において一貫して実践した作家であると言え、「尋根文学」の作家たちは周作人や沈從文の継承者であると言える。

沈從文は1988年にノーベル文学賞の候補者に指名され、莫言は2012年に受賞した。このことは、地域性や現地住民の特徴溢れる中国文学が世界に認められ、世界文学に名を連ねたことの証明である。周作人と沈從文は、広く世界的な視野を持ち、中国文学が世界で地位を確立するための理論や実践に偉大な貢献があるといえるだろう。

沈從文は自分の選択に対し、「私は左傾を軽視せず右翼も軽蔑しない。私は「真実」だけを信仰する」⁽⁵⁴⁾と述べている。彼は文学思潮の乱立する民国時期において、真実性という主張を選択して堅持し、人類、中国文学、ひいては世界文学に関心を持っている広大な視野があることを示した。このような広大な視野こそ、沈從文の作品が世界で遠く長く伝播する理由であろう。

注

- (1) 創造社の主要刊行物。1926年3月に上海で創刊、1929年1月に停刊した。
- (2) 「個人主義的文藝老早過去了」、「代替你們而起的」、「無産階級的文藝」郭沫若「英雄樹」、『創造月刊』第1巻第8期、1928年1月、pp.2-3。

- (3) 「紙面上写着许多“打，打”，“杀，杀”，或“血，血”」魯迅「革命文学」，《『民衆旬刊』第5期，1927年10月21日。（『魯迅全集』第3卷，人民出版社，2005年11月初版による，p.567）。
- (4) 「倘不明白革命的实际情形，也容易变成“右翼”。革命是痛苦的，其中也必然混有污秽和血，决不是如诗人所想像的那般有趣，那般完美；革命尤其是现实的事，…（筆者中略）…决不如诗人所想像的那般浪漫」魯迅「對於左翼作家連盟的意見」，《『萌芽月刊』第1卷第4期，1930年4月1日。（前掲『魯迅全集』第4卷による，p.238-239）。
- (5) 『現代漢語詞典』（中国社会科学院語言研究所詞典編輯室，商務印書館，2012年6月第6版，p.1006）によつて、「丘」と「八」は「兵」に成り立つ，けなす意味がある。
- (6) 沈從文「薄寒」，《『小説月報』第21卷第9号，1930年9月10日。
- (7) 「两晋，南北朝及唐，五代，宋，元，明，清，无时不有征苗事起」石啓貴『湘西苗族实施調查報告』，湖南人民出版社，1986年12月初版，p.33。
- (8) 前掲『湘西苗族实施調查報告』，p.33。
- (9) 「当真能掘出一个大源泉的还非得要那些别一阶级的人」沈從文「北京之文芸刊物及作者」，《『文社月刊』第1卷5，6，7册，1926年2，3，6月。（『沈從文全集』第17卷，北岳文芸出版社，2002-2003年による，p.13）。
- (10) 齊藤大紀「一九二五年，北京，文芸の畑——沈從文「北京之文芸刊物及作者」をめぐつて一」，《『野草』第77号，2006年2月，p.47。
- (11) 前掲「一九二五年，北京，文芸の畑——沈從文「北京之文芸刊物及作者」をめぐつて一」，p.36。
- (12) 「在它（副刊）上面，我们得到一种同样的感觉，就是觉得《小说月报》上每期的几个熟姓名样样这里都有，当然不能说是外面进来的客坐编辑先生所取的手段是拒绝，但倘若是熟人，稿子总比较的容易上副刊一点。（这在任何刊物上都是一样，其实这也给了许多困难与编辑者。）」前掲「北京之文芸刊物及作者」，p.8。
- (13) 1925年10月10日創刊，第10期で停刊した。
- (14) 「看刊物的人“一只眼在文章上，另一只眼却放在文章题目以下的人名上”毕竟如此聪明懂事的比“单把两只眼睛放在文章上不问那人的名姓”的傻人为多，故近来的发行数每期只印一千分，且有十期以后无法继续的消息。」前掲「北京之文芸刊物及作者」，p.18。
- (15) 「或者这是我的一种偏见，我以为若把未来的文艺的花朵希望如像他们一般认为培养茂盛起来，终究是要使我们失望的！我的意思是以为凡是如今自己把发掘文艺的锄头扛到肩膀上向前走的学生纵能掘到点什么，但当

- 真能掘出一个大源泉的还非得要那些别一阶级的人出来动手不可。这别一阶级的人不是学生教授，也不是官僚政客，只是那些剃头匠，裁缝，车夫，兵士，等等。」前掲「北京之文艺刊物及作者」，p.13。
- (16) 前掲「一九二五年，北京，文艺の畑——沈從文「北京之文艺刊物及作者」をめぐって——」，p.47。
- (17) 初出不詳のため，発表年代に関する記載がない。しかし文脈から，40年代前半に書かれたと推測できる。本論文が使用するものは、『沈從文全集』第17巻に収録されるものである。
- (18) 「描绘英雄容易，有声有色，刻划平凡即感觉棘手。」沈從文「明日的文学作家」，前掲『沈從文全集』第17巻，p.356-357。
- (19) 「写出一个时代历史场面或一群人的生命发展以及哀乐得失式样的宏章巨制，似乎就还待另外一种作家来努力」前掲「明日的文学作家」，p.357。
- (20) 「这种年青朋友在目前，是从任何一个部队中都可发现的，或因勇于学习，或因忙于其它工作，当前尚无从事写作的兴趣，然而他们的存在，将来终必有一日能有机会来好好使用手中这支笔，来叙述这个民族新生奋斗的经过，是毫无可疑的！」前掲「明日的文学作家」，p.357。
- (21) 「刚到北京，我连标点符号都还不知道」沈從文，「從新文学转到历史文物——一九八一年十一月二十四日在美国聖若望大学的講演」，『海内外』第29期，1981年2月。（前掲『沈從文全集』第12巻による，p.384）
- (22) 「投稿の几十篇，粘连成一卷，当着林语堂，钱玄同，周作人等开玩笑：“这是个大作家沈某某写的。”于是撕得粉碎，投入字篓完事」沈從文「致王千一」，前掲『沈從文全集』第12巻，p.468。
- (23) この手紙は，孫伏園が『晨報副刊』から『京報副刊』へ転職した後に「一封未曾付郵的信」（1924）という題で『晨報副刊』で発表された。
- (24) 「这一本小小册子...（筆者中略）...文字则似乎更拙更怪，不过我却正想在这单纯中将我的风格一转，索性到我自己的一条路上去。其不及大家名家善于用美丽漂亮生字长句，也许可以藉此分别出我只是一个乡巴老吧。我原本是不必在乡巴老的名称下加以否认的。思想与行为与衣服，仿佛全都不免与时髦违悖，这缺陷，是虽明白也只有尽其缺陷过去，并不图设法补救，如今且有意来作乡巴老了。」沈從文『『阿黑小史』序』，前掲『沈從文全集』第7巻，p.231。
- (25) 沈從文「習作選集代序」，『国聞週報』第13巻第1期，1936年1月1日，p.4。

- (26) 「他反复自称为“乡下人”，就表明他对苗族文化传统的认同」凌宇「從苗漢文化和中西文化的衝擊觀沈從文」，《中國現代，當代文學研究》，1986年6月，p.246。
- (27) 今泉秀人「“鄉下人”とは何か——沈從文と民族意識」，《野草》第48号，1991年8月，p.90。
- (28) 「學校有幾個鄉下人來的同學，身體皆壯大異常，便有人想出主意，提議要這些鄉下人裝成馬匹，讓較小的同學跨到馬背上去，同另一匹馬上另一員勇將來作戰」沈從文『從文自傳』，上海第一出版社，1934年7月初版，1935年5月再版による，p.40。
- (29) 「有些兵士不能隨便外出，有些人又可自由出入。照我想來則大約係城裏人可以外出，鄉下人可以外出却不敢外出。我記到我的出門是不受任何限制的」前掲『從文自傳』，p.72。
- (30) 「因為交通不便，遂致風氣閉塞。外間知識既不易輸入，本地人民亦絕少外出。…（筆者中略）…為匪種烟在這裡還不知究竟是否犯法。」李震一『湖南的西北角』宇宙書局印行，1947年，p.55。
- (31) 「有些人對湘西的民族性，是要發生誤解的。我也曾同好些朋友，談到此一問題，他們常常脫口而出的是：「匪的作风，烟的毒素」。這與其說是一種不禮貌的嘲笑，毋寧說是一種極惡意的誣蔑。」前掲『湖南的西北角』，p.28。
- (32) 沈從文「略傳—從文自序」，王哲甫編著『中國新文學運動史』，景山書社1933年9月。（前掲『沈從文全集』第13卷による，p.371）
- (33) 沈從文は「龍朱」（1929）の中で、自分の苗族の出身を表明した。『從文自傳』の中で自分の軍人出身を表明した。
- (34) 前掲『從文自傳』，p.158-159。
- (35) 「我当时追求的理想，就是五四运动提出来的文学革命的理想」前掲「從新文學轉到歷史文物——一九八〇年十一月二十四日 在美国聖若望大学的講演」，p.348。
- (36) 王亜蓉『沈從文晚年口述』，陝西師範大學出版社，2003年10月初版，p.144。
- (37) 沈從文「記胡也頻」，上海『時報』，1931年10月4—11日。（前掲『沈從文全集』第3卷による，p.17）
- (38) 「正可代表“五四”以来自由主义者对于“文学上的自由”一种看法」，「对于人与艺术，作品与社会，尤有极好的见地。」沈從文「從周作人魯迅作品學習抒情」，《國文月刊》第1卷第2期，1940年9月16日。（『沈從文全集』第16卷による，p.261，263）
- (39) 「永远是健康而合乎人性的。」前掲「從周作人魯迅作品學習抒情」，

p.265。

(40) 前掲「北京之文艺刊物及作者」, p.13。

(41) 「沈从文后来倡导的抽象美学观,与周作人1920年提出的这一观点极为一致」,「沈从文作为五四“人的艺术派文学”的传人,是当之无愧的」孫歌「試論抽象——讀沈從文四十年代論說文」,『吉首大学学报』,1995年第3期, p.20-21。

(42) 「一个动人的名词」沈從文「蠅虛」(一),『戰國策』第1期,1940年4月1日。(『沈從文全集』第11卷による, p.6)

(43) 「人道主義為本,对于人生諸問題,加以記錄研究的文字,便謂之人的文学」周作人「人的文学」,『新青年』第5卷第6号,1918年12月。

(44) 前掲「人的文学」。

(45) 前掲「人的文学」。

(46) 「我所說的人道主義,...(筆者中略)...是一種個人主意的人間本位主義。這理由是,第一,人在人類中,正如森林中的一株樹木。森林盛了,各樹也都茂盛。...(筆者中略)...第二,個人愛人類,就只為人類中有了我,与我相關的緣故。...(筆者中略)...所謂利己而又利他,利他即是利己,正是這個意思。所以我說的人道主義,是從個人做起。...(筆者中略)...愛人類,便須先使自己有人的資格,占得人的位置。」前掲「人的文学」。

(47) 「平民文學...(筆者中略)...就是普遍與真摯兩件事。第一,平民文學應以普通的文體,寫普遍的思想與事實。我們不必記英雄豪傑的事業,才子佳人的幸福,只應記載世間普通男女的悲歡成敗。...(筆者中略)...第二,平民文學應以真摯的文體,記真摯的思想與事實。...(筆者中略)...表出我的真意實感。」周作人「平民的文学」,『每週評論』第5号,1919年1月19日。

(48) 「是獨立的,却又原是人性的」周作人「自己的園地」,『晨報副鏤』,1922年1月22日。

(49) 「只要是遺傳環境所融合而成的我的真的心博...(筆者中略)...這樣的作品,自然的具有他應具有的特性,便是國民性,地方性与个性,也即是他的生命。」周作人「地方与文艺」,杭州『之江日報』,1923年3月22日(『談龍集』,上海開明書店,1927年12月による。)

(50) 「提起“時代”,真是一言難盡。為了追逐這個名詞,中国近十年来至少有三十萬二十歲以內的青年腐爛在泥土里。這名詞本来似乎十分空虛,然而却使青年人感到一種“順我者生逆我者滅”的魔力。...(筆者中略)...把“為大眾”一個觀念囫圇吞棗咽下肚里后,結果便在一種莫名其妙矯揉造作情緒中,各自寫出了一堆作品。這些作品...(筆者中略)...對出版業雖增加了不少刺激,對讀者却只培養了他們對新文学失望的反感。原因在此:記着

- “時代”，忘了“藝術”。」沈從文「作者間需要一種新運動」，天津『大公報·文芸副刊』，1936年10月20日。
- (51)「若使中国小说能与世界文化对话，非要能浸出丰厚的中国文化。」阿城「話不在多」，『文匯報』，1985年4月22日。
- (52)「理想的中國文學，是有人類共同的性情而又完具民族與地方性的」周作人「讀『草堂』」，『晨報副鑄』，1923年1月12日。
- (53)「強烈的地方趣味也正是“世界的”文學的一個重大成分。」周作人「『舊夢』序」，『晨報副鑄』，1923年4月8日。
- (54)「我不輕視左傾，却也不鄙視右翼，我只信仰“真實”」沈從文「記丁玲女士」『國聞週報』第10卷29-50，1933年7月24日-12月18日。